

平成 25 年度

病害虫発生予報第 3 号

平成 25 年 6 月 20 日

三重県病害虫防除所

515-2316 三重県松阪市嬉野川北町 530

TEL 0598-42-6365 Fax 0598-42-7568

ホームページ<http://www.mate.pref.mie.lg.jp/boiyosyo/>

目 次

	ページ
1. 向こう 1 か月の予報と対策	1
2. 作物別の状況	2
3. 発生時期・発生量(平年比)の予察根拠	8
4. 予察項目の見方	15
5. 今月のトピックス(カンキツそうか病について)	16
6. 気象のデータ	17
7. おしらせ	19

1. 向こう 1 か月の予報と対策

1) 作物

イネでは、斑点米カメムシ類の発生量は**やや多**と予想されます。畦畔など、圃場周辺での発生状況に注意してください。葉いもちの発生量は**平年並**、穂いもちの発生時期および発生量は**平年並**と予想されます。セジロウンカの発生時期および発生量は**平年並**、紋枯病の発生時期は**平年並**、発生量は**やや少**と予想されます。白葉枯病、イネクロカメムシの発生量は**平年並**、ツマグロヨコバイの発生量は**やや少**と予想されます。

2) 果樹

カンキツでは、ミカンハダニの発生量は**やや多**と予想されます。発生密度が高くないうちに薬剤散布を行ってください。そうか病、黒点病、かいよう病(温州みかん)、チャノキイロアザミウマの発生量は**平年並**、かいよう病(中晩柑類)の発生量は**やや少**と予想されます。

ナシでは、黒星病の発生量は**やや多**と予想されます。発病部位を除去し、薬剤散布を行ってください。ハダニ類の発生量は**平年並**と予想されます。

ブドウでは、べと病の発生量は**やや多**と予想されます。圃場をよく観察し、発病を認めたら薬剤散布を行ってください。

果樹共通では、果樹カメムシ類の発生量は**少**と予想されます。

3) 茶

チャでは、カンザワハダニ、チャノコカクモンハマキの発生量は**多**、チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマの発生量は**やや多**と予想されます。摘採時期に注意して薬剤散布してください。クワシロカイガラムシの発生時期は**平年並**、発生量は**やや多**と予想されます。枝幹に十分かかるように薬剤散布しましょう。炭疽病、チャノホソガの発生量は**やや少**と予想されます。

4) 野菜

イチゴでは、ハダニ類の発生量は**やや多**と予想されます。発生が多くなると防除が難しくなるため、圃場全体をよく観察し、発生程度の低いうちに徹底して薬剤防除を行ってください。うどんこ病、炭疽病の発生量は**平年並**と予想されます。

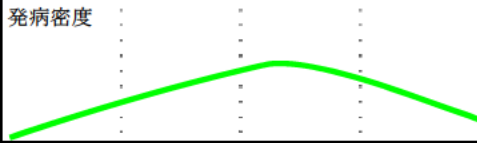
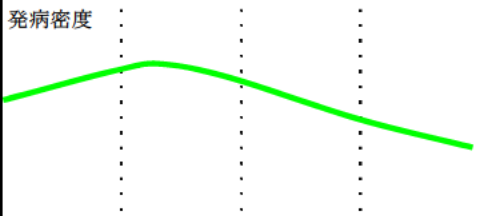
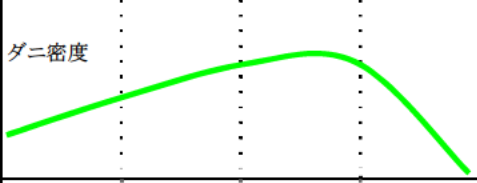
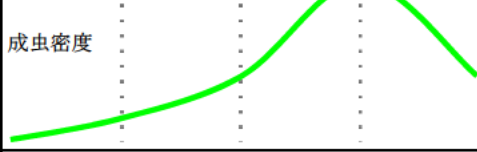
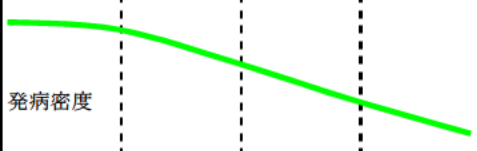
ネギでは、ネギゴガの発生量は**平年並**と予想されます。

農薬はラベルの表示を確認して、正しく使用してください。

2. 作物別の状況

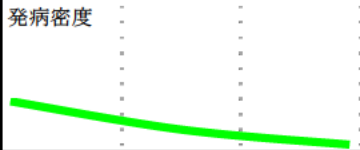
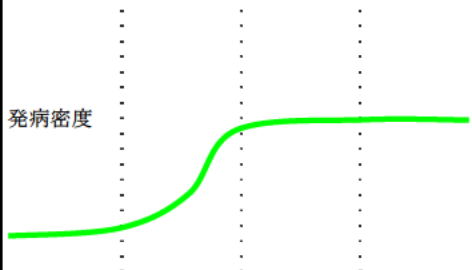
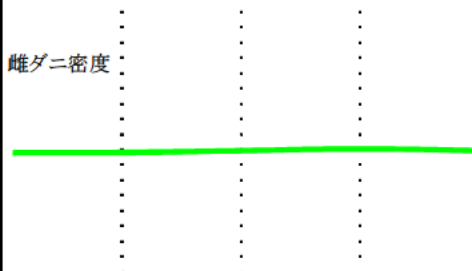
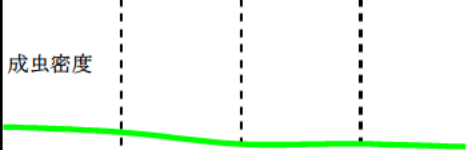
作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						6月		7月		
						下旬	下旬	中旬	下旬	
イネ	葉いもち	—	平年並	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 病害虫防除技術情報第5号(6月14日発表)。 2) 補植用置き苗は発生源となるので、速やかに取り除いてください。 3) 圃場を見回り、早期発見、早期防除に努めましょう。 4) いもち病発生予測支援システム(プラスタム)によると、6月下旬以降、本田で発病が確認され始めると予想されます 5) プラスタムの最新情報は病害虫防除所ホームページで随時更新しています。
	穂いもち	平年並	平年並	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 葉いもちが上位葉に多く発生すると、穂いもちへ移行しやすくなります。圃場および周辺圃場での葉いもちの発生状況に注意してください。 2) 薬剤散布は穂ばらみ期から穂揃い期に予防的に行ってください。
	紋枯病	平年並	やや少	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 幼穂形成期頃(穂肥時期)から発生が目立つようになります。 2) 水面に近い茎から茎へ感染します。薬剤散布によって病斑の上位葉への進展を阻止してください。
	白葉枯病	—	平年並	小	低					<ol style="list-style-type: none"> 1) 深水、冠水、台風によって感染や発病が助長されます。 2) 常発地では台風直後に薬剤散布をしましょう。予防的な薬剤散布は効果が高いです。 3) 「みえのゆめ」は耐病性の弱い品種なので注意してください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項
						6月		7月		
						下旬	中旬	下旬	中旬	
イネ	斑点米カメムシ類	—	やや多	小	高		<ol style="list-style-type: none"> 1) 畦畔などのイネ科雑草で増殖します。草刈りをこまめに行い、イネ科雑草の穂がつかないように管理してください。 2) 水田内で雑草が多発すると、水田への侵入を助長するため、早めに除去しましょう。 3) 草刈りは出穂 10 日前までに行いましょう。出穂直前および出穂後の草刈りは、水田への侵入を助長するおそれがあります。 4) 本田粒剤で防除する場合は、薬剤の特性に合わせて処理時期を決定してください。液剤は穂揃い期に散布してください。 			
	イネクロカメムシ	—	平年並	小	普通		<ol style="list-style-type: none"> 1) 常発地で薬剤散布する場合は、越冬成虫の発生量がピークとなる6月下旬に実施してください。 2) 日中は株元に潜んでいるので、夕方や曇天の日に薬剤散布を行うと効果的です。 			
	ツマグロヨコバイ	—	やや少	中	低		<ol style="list-style-type: none"> 1) 当面、防除が必要な密度には達しないと思われます。 			
	セジロウンカ	平年並	平年並	小	低		<ol style="list-style-type: none"> 1) 例年、被害の発生はごく局所的であるため、多飛来が認められた場合は、病害虫防除技術情報で臨時発表します。 			
カンキツ	そうか病	—	平年並	小	普通		<ol style="list-style-type: none"> 1) 常発圃場や昨年多発した圃場、幼木園、高接ぎ更新園の温州みかんでは、発生に注意してください。 2) 果実への感染は梅雨末期頃までといわれています。 			

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項		
			平年比	平年比		程度	平年比	6月			7月	
								下旬	下旬		中旬	下旬
カンキツ	黒点病	—	平年並	小	普通	発病密度		1) 枯枝が伝染源です。梅雨時期の枯枝発生に注意し、樹冠内や圃場内の枯枝を除去してください。 2) 薬剤散布は前回の散布後に積算降水量が200~300mmに達した時を目安に実施してください。				
	かいよう病	—	温州平年並 中晩柑やや少	温州小 中晩柑小	温州低 中晩柑普通	発病密度		1) 降雨があると急速に感染が広がるので、発生圃場では雨の合間に防除してください。 2) 発病枝葉、果実は、見つけ次第剪除し処分してください。 3) 幼木や高接樹ではミカンハモグリガの被害部に発病しやすいので、ミカンハモグリガの防除を実施してください。 4) 中晩柑類では、梅雨期頃から10月中下旬頃まで、果実への感染が起こります。				
	ミカンハダニ	—	やや多	大	高	ダニ密度		1) 発生密度が高くなると防除が困難になります。1葉当りの雌成虫発生数が0.5~1.0頭程度を目安に防除してください。 2) 薬剤は葉裏にもかかるように散布してください。 3) 同一系統薬剤の連用は避けてください。				
	チャノキイロアザミウマ	—	平年並	中	普通	成虫密度		1) 寄生果率10%を目安に防除してください。 2) 7月になり果実肥大が進むと果頂部で加害します。 3) 圃場周辺のイヌマキ・サンゴジュ・チャ等が発生源となります。				
ナシ	黒星病	—	やや多	中	普通	発病密度		1) 発病果及び発病葉は除去して、圃場外に持ち出し処分してください。 2) 発病が確認される圃場では、すみやかに防除を計画してください。 3) 薬剤散布を実施するときは薬剤をていねいに散布し、同一系統薬剤の連用を避けてください。				

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						6月	7月			
							下旬	上旬	中旬	
ナシ	ハダニ類	—	平年並	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 1葉当り寄生数が1~2頭で防除を実施してください。 2) 7~8月に密度が高くなります。徒長枝での発生にも注意してください。 3) 同一系統薬剤の連用は避けてください。
ブドウ	べと病	—	やや多	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 降雨が連続すると、病徴が急速に進展するので、葉裏に病斑を認めたら直ちに薬剤を散布してください。 2) 降雨の合間に防除を計画してください。 3) 被害葉及び被害落葉は感染源となるので圃場外に持ち出して処分してください。 4) 同一系統薬剤の連用を避けてください。
果樹共通	カメムシ類	—	少	小	低					<ol style="list-style-type: none"> 1) 局所的に密度が高まる場合があります。ナシ(無袋栽培)、カキでは、まとまった飛来を確認したら、防除を実施してください。 2) 中山間地や以前多発したことがある地域では、圃場への飛来に注意してください。
チャ	炭疽病	—	やや少	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 旧葉の病斑が感染源です。新葉の展葉までに毛茸の脱落部分から感染します。 2) 降雨と25℃前後の適温条件で、発生が多くなります。 3) 窒素過多、カリウム不足で多発する傾向があります。 4) 耐性菌出現を避けるため、同一系統の薬剤の連用は避けましょう。
	カンザワハダニ	—	多	大	高					<ol style="list-style-type: none"> 1) 病害虫防除技術情報第6号(6月14日発表)。 2) 増殖率が高く、密度が高くなると防除が困難になります。 3) 葉裏をよく観察して、圃場の発生状況を確認してください。 4) 薬剤は葉裏に十分かかるように丁寧に薬剤散布しましょう。 5) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一系統の薬剤の連用は避けましょう。 6) 土着天敵(ケナガカブリダニ等)の活動が盛んな圃場では、密度増加は抑えられます。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						6月		7月		
						下旬	下旬	中旬	下旬	
チャ	チャノホソガ	—	やや少	小	普通					1) 0.9 葉期までに産卵があった可能性がある場合は、葉裏の産卵状況、幼虫の発生をよく見て防除しましょう。 2) 成虫の発生状況については、病害虫防除所のホームページにフェロモントラップ誘殺状況を掲載していますので参考にしてください。
	チャノミドリヒメヨコバイ	—	やや多	中	普通					1) 新芽を加害するので、多発を確認したら防除しましょう。 2) 有効積算温度による発生消長予測式では、第3世代成虫発生ピークは6月第4半旬、第4世代は7月第1半旬と予測されます。
	チャノキイロアザミウマ	—	やや多	中	普通					1) 新芽の伸張とともに増殖するので、多発を確認したら防除しましょう。 2) 有効積算温度による発生消長予測式では、第2世代の成虫発生ピークは6月第4半旬、第3世代は7月第2半旬と予測されます。
	クワシロカイガラムシ	平年並	やや多	中	普通					1) 有効積算温度による発生消長予測式では、第2世代幼虫の孵化最盛日は7月第4半旬(四日市市7月16日、亀山市7月15日、松阪市飯南町粥見7月17日)と予測されます。 2) 発生時期は平坦地で早く、山間地では遅くなります。圃場で幼虫の孵化を確認してから防除しましょう。 3) 樹冠内の枝幹に十分かかるように薬剤散布しましょう。
	チャノコカクモンハマキ	—	多	中～大	普通					1) 病害虫発生予察注意報第2号(5月20日発表)。 2) 成虫発生最盛日の7～15日後が防除適期です。病害虫防除所のホームページにフェロモントラップ誘殺状況を掲載していますので参考にしてください。 3) 薬剤抵抗性の発達を避けるため、同一系統の薬剤の連用は避けましょう。

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量		要防除 圃場率 平年比	発生消長の一例				防除の注意事項
			平年比	程度		6月	7月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
イチゴ	うどんこ病	—	平年並	中	普通	発病密度 				<ol style="list-style-type: none"> 1) 育苗期の防除を徹底してください。 2) 薬剤防除は予防散布に努めます。葉裏から発生しやすいので、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布してください。 3) 発病を認めたときは、集中的に散布して感染拡大を防いでください。
	炭疽病	—	平年並	中	普通	発病密度 				<ol style="list-style-type: none"> 1) 病原菌は高温多湿条件を好み、梅雨時期以降に発生が多くなるため、十分な注意が必要です。 2) 病原菌(孢子)を含む水の跳ね返りで感染が拡大します。頭上灌水は避け、株を濡らさないようにしてください。 3) 発病株は感染源となるため、周辺株を含めて早期に除去し、処分してください。 4) 薬剤防除は、薬液が株元まで十分かかるよう丁寧に散布してください。
	ハダニ類	—	やや多	小	高	雌ダニ密度 				<ol style="list-style-type: none"> 1) 病害虫防除技術情報第7号(6月17日発表)。 2) 作物残渣から歩行によって移動します。葉かき後の残渣は圃場外に持ち出し、速やかに処分してください。 3) 多発すると防除が困難になります。早期発見に努め、発生初期に防除を行ってください。また、散布は葉裏を中心に丁寧に行ってください。 4) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一薬剤や同一系統薬剤の連用は避けてください。
ネギ	ネギコガ	—	平年並	小	普通	成虫密度 				<ol style="list-style-type: none"> 1) 春から秋にかけて4~5回発生します。 2) 幼虫は葉の内部に潜り、表皮を残して食害します。潜入防止のため、発生初期から防除を行うことが重要です。

3. 発生時期・発生量(平年比)の予察根拠

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	葉いもち	-	平年並	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 1か月予報(6月14日発表)によると、平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±) 2) プラストム(6月18日現在)によると、感染好適条件は6月10日から12日にかけて、県内の広範囲で出現 (±) 3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、本田における発生圃場率0%(平年0.1%)と平年並に少ない傾向 (±) 4) 広域病害虫防除員調査圃場(6月7日)では、置き苗での発生を確認 (+) 5) 一般圃場では、発生量は無～少(概して平年並に少) (±) <p>考察：巡回調査結果、一般圃場の発生状況、プラスタムによる判定結果および今後の気象条件から、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	穂いもち	平年並	平年並	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 農業研究所作況試験田(4月25日移植コシヒカリ、移植40日目)によると、葉齢の進展は平年並の傾向 (発生時期±) 2) 水稻生育予測システム(津アメダスデータ、4月25日移植コシヒカリ、6月17日現在)によると、予想出穂期は7月19日頃(平年7月20日頃)と平年並の予想 (発生時期±) 3) 一般圃場では、移植の最盛期は4月第6半旬と平年に比べてやや遅かったが、平年並の生育に回復 (発生時期±) 4) 葉いもち発生量は平年並の予想 (±) <p>考察：水稻の生育状況を考慮して、予想発生時期は平年並、葉いもちの予想発生量を考慮して、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	紋枯病	平年並	やや少	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 1か月予報(6月14日発表)によると、気温は平年並か高い予想 (+) 2) 農業研究所作況試験田(4月25日移植コシヒカリ、移植40日目)によると、葉齢の進展は平年並、茎数は多の傾向 (発生時期±、発生量+) 3) 巡回調査圃場(昨年8月)では、発生圃場率25.6%(平年30.4%)と少、発病度1.6(平年2.4)と少、発病株率4.7%(平年11.4%)と少 (-) 4) 一般圃場では、移植の最盛期は4月第6半旬と平年に比べてやや遅かったが、平年並の生育に回復 (発生時期±) <p>考察：水稻の生育状況から予想発生時期は平年並、感染源となる越冬菌核量は少ないと考えられますが、今後の気象条件を考慮して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	白葉枯病	-	平年並	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 1か月予報(6月14日発表)によると、平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±) 2) 4月下旬の移植以降、県内において日降水量100mm以上の降雨があったのは1日のみ(熊野新鹿5月29日、104.0mm) (-) <p>考察：これまでのところ、激しい風雨を伴う冠水の機会は少なく、今後の気象条件を考慮して、発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	斑点米カメムシ類	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(4月第1半旬~6月第3半旬)では、誘殺数はアカスジカスミカメ22頭(平年11.6頭)と多、アカヒゲホソミドリカスミカメ41頭(平年34.2頭)と多 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、畦畔イネ科雑草すくい取りによる発生地点率および成幼虫数は、ホソハリカメムシで11.3%(平年10.4%)とやや多、0.2頭(平年0.2頭)と平年並、クモヘリカメムシで0%(平年0.2%)と平年並に少、0頭(平年0.01頭)と平年並に少、シラホシカメムシ類で7.5%(平年5.6%)と多、0.11頭(平年0.09頭)と多、アカスジカスミカメで50.6%(平年24.4%)と多、4.6頭(平年1.2頭)と多 (+)</p> <p>考察: 予察灯、巡回調査結果から、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	イネクロカメムシ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(4月第1半旬~6月第3半旬)では、誘殺数は水田位置11頭(平年6.5頭)と多、畑位置410頭(平年141.2頭)と多 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発生圃場率1.9%(平年4.3%)と少、25株当たり成虫数0.01頭(9年平均0.05頭)とやや少の傾向 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無~少(概して平年並に少) (±)</p> <p>考察: 巡回調査結果から、現状の発生量は少ない状況ですが、予察灯を重視し、今後の増加を考慮して、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	ツマグロヨコバイ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(5月第1半旬~6月第2半旬)では、誘殺数は松阪市水田位置0頭(平年0.5頭)と平年並に少ない傾向、畑位置77頭(6年平均42.3頭)と多の傾向、伊賀市0頭(平年0頭)と平年並に少ない傾向、御浜町0頭(平年0.5頭)と平年並に少ない傾向 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、払い落とし成幼虫数0.04頭(平年0.3頭)と少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無 (-)</p> <p>考察: 予察灯、巡回調査結果、一般圃場の発生状況から、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	セジロウンカ	平年並	平年並	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(県内4か所)では、6月8日現在、未飛来(松阪市・平年初飛来7月6日) (発生時期±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、払い落とし成虫数は0頭(平年0.004頭)と平年並に少ない傾向 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無 (±)</p> <p>4) ウンカ飛来状況(JPP-NET)によると、九州では6月中旬まで多飛来は無 (-)</p> <p>考察: これまでの飛来状況から発生時期は平年並、現在の飛来状況から当面は密度が大きく上昇することはないと予想されるため、予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
カンキツ	そうか病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月14日発表)によると、平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃(6月中旬、無防除)では、春葉発病率 87.0%(平年 54.9%)と多、発病果率 92.5%(平年 51.1%)と多 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、春葉発病度 0(平年 0.1)と平年並 (±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察：巡回調査結果および一般圃場の状況を重視して、現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
	黒点病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月14日発表)によると、平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃(6月中旬、無防除)では、果実発病度 19.9(平年 5.9)と多 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、春葉発病度 0.2(平年 0.8)と平年並 (±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>5) 感染源となる枯枝は平年並 (±)</p> <p>考察：巡回調査結果および一般圃場の状況を重視して、現状の発生量は平年並と考えられ、大きな増減の要因はなく、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
	かいはう病	-	温州 平年並 中晩柑 やや少	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月14日発表)によると、平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃(中晩柑)における果実での初発は、6月2日(平年6月7日)とやや早 (+)</p> <p>3) 県予察圃(6月中旬、新甘夏、無防除)では、春葉発病率 1.1%(平年 8.6%)と少、発病果率 1.7%(平年 1.6%)と平年並 (-)</p> <p>4) 巡回調査圃場(6月第2週)では、春葉発病率は温州みかんでは 0%(平年 0.3%)と平年並、中晩柑では 0%(平年 4.5%)と少 (-)</p> <p>5) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察：温州みかんでは、現状の発生量は平年並に少ないと考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。中晩柑類では、現状の発生量はやや少と考えられ、引き続き予想発生量はやや少と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
カンキツ	ミカンハダニ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月14日発表)によると、平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃(6月中旬)では、100 葉当り寄生頭数は無防除区 17.8 頭(平年 17.4 頭)と平年並、慣行防除区 1.1 頭(平年 2.7 頭)と平年並 (±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発生圃場率 76.9%(平年 46.2%)と多、春葉寄生率 18.5%(平年 9.6%)と多、寄生頭数 1.00 頭/葉(平年 0.56 頭/葉)と多 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並～やや多(概してやや多) (+)</p> <p>考察：巡回調査結果および一般圃場の状況を重視して、現状の発生量はやや多と考えられ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>
	チャノキイロアザミウマ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃黄色粘着トラップ(6月上旬、無防除)では、誘殺数 0.59 頭/日(平年 0.39 頭/日)と多 (+)</p> <p>2) 県予察圃(6月中旬、無防除)では、100 果当り寄生虫数 0.83 頭(平年 0.42 頭)とやや多 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、被害果率 0.2%(8年平均 0.5%)と平年並の傾向 (±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察：巡回調査結果および一般圃場の発生状況を重視して、現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
ナシ	黒星病	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月14日発表)によると、平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発病葉率 1.1%(平年 1.6%)とやや少、ただし一部圃場では果梗部での発生を確認(±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量はやや多 (+)</p> <p>考察：一般圃場の状況を重視して、現状の発生量はやや多と考えられ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>
	ハダニ類	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月14日発表)によると、平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、寄生葉率 0%(平年 1.0%、ただし 8 か年は 0%)と平年並、寄生頭数 0 頭/葉(平年 0.05 頭/葉)と平年並 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察：現状の発生量は平年並に少ないと考えられ、大きな増加の要因はなく、予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
ブドウ	べと病	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月14日発表)によると、平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発病葉率0%(平年0.1%)と平年並 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並だが、昨年秋の発生量はやや多 (+)</p> <p>考察：現状の発生量は平年並に少ないですが、昨年の発生状況から病原菌の越冬密度は高いと考えられ、予想発生量はやや多と考えます。</p>
果樹共通	カメムシ類	-	少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(御浜町:6月1日~10日)では、誘殺数はチャバネアオカメムシ9頭(平年483頭)と少、ツヤアオカメムシ5頭(平年74頭)と少 (-)</p> <p>2) 予察灯(畑・松阪市:5月16日~6月15日)では、誘殺数はチャバネアオカメムシ4頭(平年379頭)と少、ツヤアオカメムシ14頭(平年85頭)と少 (-)</p> <p>3) フェロモントラップ(5月9日~6月8日)では、チャバネアオカメムシ誘殺数は、山地(津市白山町川口)で49頭(平年152頭)、中間地(津市白山町二本木)で249頭(平年382頭)、平坦地(松阪市嬉野川北町)で3頭(平年74頭)といずれも少 (-)</p> <p>4) 巡回調査圃場(6月第2週、カンキツ・ナシ・カキ圃場)では、叩き落とし、または見取り調査による飛来は未確認 (±)</p> <p>5) 一般圃場では、発生量は少~やや少(概して少) (-)</p> <p>考察：現状の発生量は少と考えられ、今後1か月間に圃場へ飛来する予想発生量は少と考えます。</p>
チャ	炭疽病	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月14日発表)によると、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発生圃場率4.3%(平年6.2%)とやや少、発病葉数0.05枚/m²(平年0.43枚/m²)と少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少 (-)</p> <p>考察：現状の発生量はやや少と考えられ、引き続き予想発生量はやや少と考えます。</p>
	カンザワハダニ	-	多	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月14日発表)によると、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃(6月上旬)では、寄生葉率9.0%(平年3.8%)と多、寄生頭数0.12頭/葉(平年0.21頭/葉)と少 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発生圃場率52.4%(平年28.0%)と多、寄生葉率10.9%(平年3.5%)と多、寄生頭数0.25頭/葉(平年0.15頭/葉)とやや多 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は多 (+)</p> <p>考察：現状の発生量は多と考えられ、引き続き予想発生量は多と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
チャ	チャノホソガ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月14日発表)によると、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃フェロモントラップ(5月第4半旬～6月第2半旬)では、誘殺数 1099 頭(平年 2882.4 頭)と少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、巻葉数 0.2 枚/m²(平年 0.7 枚/m²)とやや少 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少 (-)</p> <p>考察：現状の発生量はやや少と考えられ、引き続き予想発生量はやや少と考えます。</p>
	チャノミドリヒメヨコバイ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月14日発表)によると、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃吸引粘着トラップ(5月第3半旬～6月第2半旬)では、捕殺数 11 頭(平年 9.1 頭)とやや多 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、たたき落とし虫数 4.4 頭(平年 1.5 頭)と多 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや多 (+)</p> <p>考察：現状の発生量はやや多と考えられ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>
	チャノキイロアザミウマ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月14日発表)によると、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃吸引粘着トラップ(5月第3半旬～6月第2半旬)では、捕殺数 532 頭(平年 2677.7 頭)と少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、たたき落とし虫数 32.2 頭(平年 14.1 頭)と多 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや多 (+)</p> <p>考察：現状の発生量はやや多と考えられ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>
	クワシロカイガラムシ	平年並	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月14日発表)によると、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃では、第1世代幼虫孵化最盛日は5月19日～21日(6か年平均5月19日)と平年並の傾向(発生時期±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、雄繭寄生株率 3.5%(平年 10.4%)と少、雌成虫寄生株率 14.4%(3年平均 8.7%)と多の傾向 (±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並～やや多(概してやや多) (+)</p> <p>考察：県予察圃での第1世代幼虫孵化時期から、第2世代幼虫発生時期は平年並と考えます。現状の発生量はやや多と考えられ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>
	チャノコカクモンハマキ	-	多	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月14日発表)によると、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃フェロモントラップ(5月第3半旬～6月第2半旬)誘殺数では、誘殺数 568 頭(平年 142.3 頭)と多 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、ハマキムシ類巻葉数 1.0 枚/m²(平年 0.4 枚/m²)と多 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや多 (+)</p> <p>考察：現状の発生量は多と考えられ、引き続き予想発生量は多と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イチゴ	うどんこ病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月14日発表)によると、平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発病株率8.2%(9年平均11.4%)と少の傾向 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察：現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
	炭疽病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月14日発表)によると、平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発病株率0%(平年0.02%)と平年並に少 (±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(昨年11月第2週)では、発病株率0%(平年0.4%)と少 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並に少 (±)</p> <p>考察：現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
	ハダニ類	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月14日発表)によると、平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、寄生株率21.3%(9年平均7.0%)と多の傾向 (+)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量はやや少～やや多(概してやや多) (+)</p> <p>考察：現状の発生量はやや多と考えられ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>
ネギ	ネギコガ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月14日発表)によると、平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃フェロモントラップ(5月第4半旬～6月第3半旬)では、誘殺数は372頭(平年195.0頭)と多 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、被害葉率0%(平年0.3%)と平年並に少 (±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生は認められず平年並に少 (±)</p> <p>考察：現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>

4. 予察項目の見方

1) 「作物別の状況」の見方

発生時期(平年比)： 平年の発生日からの差を「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階評価で予測します。ただし、発生時期が毎年大きく変化する病害虫では、日数の基準が下記より大きくなります。発生時期を予察する意義の小さい病害虫では予察しません。

日数	-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年発生日	1	2	3	4	5	6	
評価	早	やや早		平年並				やや遅			遅			

発生量(平年比)： 発生密度の平年値からの差を「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階評価で予測します。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少」でも見かけ上は多いと感じることがあります。

			平年値 ↓			
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少	やや少	平年並	やや多	多	

発生量(程度)： 発生程度を「小、中、大、甚」の4段階評価で予測します。評価の基準値は病害虫毎に異なりますが、大雑把には、「見た目の多さ・少なさ」です。甚になるほど見た目は多くなり、小になるほど見た目は少なくなります。「発生量(平年比)」と比

べることによって、「平年並に発生程度が小さい」「発生程度は大きい平年並の発生量である」「平年より多いが、発生程度は小さい」「平年よりやや少ないが、依然として発生程度は中くらいである」等のように判断してください。

小	中	大	甚
---	---	---	---

要防除圃場率(平年比)： 防除の必要性の目安を「低、普通、高」の3段階評価で予測します。「普通」であれば、県下の大半の圃場では防除暦に沿った通常の防除が必要と予想されます。「高」であれば、防除時期の見直しや追加防除などが必要になると予想されます。「低」であれば、防除回数を減らせるか、防除しなくても済むと予想されます。

低	普通	高
---	----	---

発消長の一例： 発生予報は向こう1か月の予報ですが、その前後を合わせて40日ほどの病害虫の発消長の一例をグラフで示します。大まかな目安として利用してください。

防除の注意事項： 向こう1か月の病害虫の特性と防除に関する説明です。

2) 「発生時期・発生量(平年日)の予察根拠」の見方

(±)：平年並の要因

(+)：発生量増加または発生時期遅延の要因

(-)：発生量減少または発生時期早期化の要因

5. 今月のトピックス「カンキツそうか病について」

◆被害の様子と本病の特徴◆

本病はカンキツ類の重要病害のひとつで、葉や若枝、果実に発生します(写真 1、2)。

葉や果実では、若くて組織が柔らかい間に感染すると、突出した「いぼ型病斑」になります。一方、組織が硬くなった後や枝に感染した場合は、かさぶた状の「そうか型病斑」になります(写真 1)。



写真 1. 葉の病徴(左:いぼ型病斑、右:そうか型病斑)

葉では萌芽直後から感染、発病しますが、ほぼ生長が止まる6月上旬以降は発病しなくなります。ただし、夏秋梢は組織が柔らかいので発病し、翌年の重要な伝染源となります。果実では、落花直後から8月下旬頃まで発病します。

カンキツの種類によって感受性が異なり(表)、温州みかんやレモンなどは発病しやすい種類です。

◆発生しやすい条件と近年の状況◆

病原菌は葉や枝の病斑内で越冬し、伝染源となります。胞子は雨水によって伝搬



写真 2. 果実の病徴

表. 各種カンキツのそうか病に対する感受性

感受性	カンキツ種
高い	温州みかん、レモン、晩白柚等
中程度	セミノール、ユズ、三宝柑等
低い	甘夏、ネーブル、不知火、ポンカン等

し、高湿度が感染好適条件なので、降雨が続くと発生が多くなります。また、柔らかい組織ほど感染しやすいので、日照不足や窒素肥料過多などにより、生育が軟弱になると発病しやすくなります。

薬剤による防除効果が高く、近年では一般圃場での発生は少ない状況です。しかし、十分な防除ができないと発生する場合があります、農業研究所紀南果樹研究室の無防除圃場では、本年は多発傾向となっています(図)。

◆防除のポイントと注意事項◆

- 1) 薬剤防除: 防除適期は4月上中旬(発芽期)、5月中下旬(開花後期)及び6月中下旬(幼果期)です。特に4月上中旬の防除が重要です。発生が認められる圃場では、来春の防除を徹底してください。
- 2) 伝染源の除去: 病斑がある葉や枝を除去します。特に、病斑が認められる夏秋梢は重要な伝染源なので、できるだけ剪除してください。
- 3) 栽培管理: 窒素質肥料の多用を避けて、軟弱な生育をさせないようにしましょう。また、風通しや陽当たりを良くして、圃場内の湿度低下を図ってください。

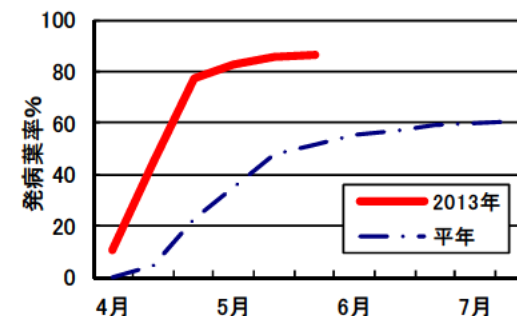


図. 紀南果樹研究室におけるカンキツそうか病発病葉率の推移
温州みかん(興津早生、無防除)、100葉調査。
平年は過去10年(2003~2012年)の平均値。

6. 気象のデータ

東海地方 1 か月予報 (平成 25 年 6 月 14 日 名古屋地方気象台発表)

東海地方の向こう 1 か月は、平年と同様に梅雨前線の影響で曇りや雨の日が多いでしょう。1 週目は南からの暖かい空気の影響で気温がかなり高くなる見込みです。特に、期間のはじめは、気温がかなり高く、これまでの少雨を解消するようなまとまった雨は降らない見込みです。

1 週目 6 月 15 日～ 21 日	高気圧に覆われて晴れる日もありますが、梅雨前線や湿った気流の影響で雲が広がりやすく、期間の終わりは雨の降る日があるでしょう。	津の降水日数・晴れ日数の平年値 3.1 日・2.7 日
2 週目 6 月 22 日～ 28 日	平年と同様に梅雨前線の影響で曇りや雨の日が多いでしょう。	同 3.2 日・2.4 日
3～4 週目 6 月 29 日～ 7 月 12 日	平年と同様に梅雨前線の影響で曇りや雨の日が多いでしょう。	同 5.7 日・5.6 日

東海地方週間天気予報 (平成 25 年 6 月 19 日 10 時 30 分 名古屋地方気象台発表)

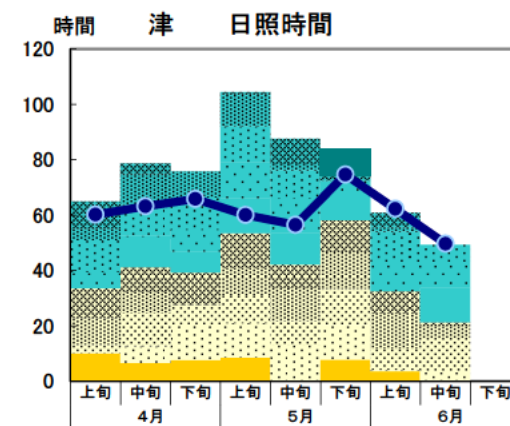
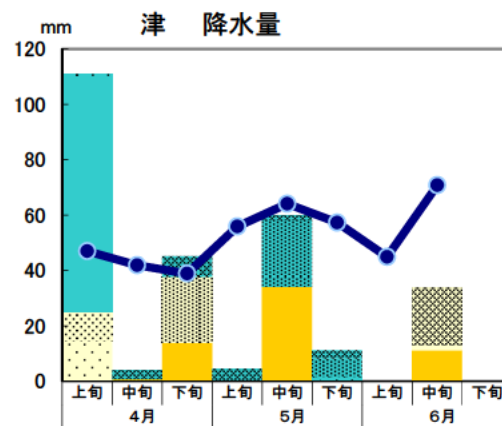
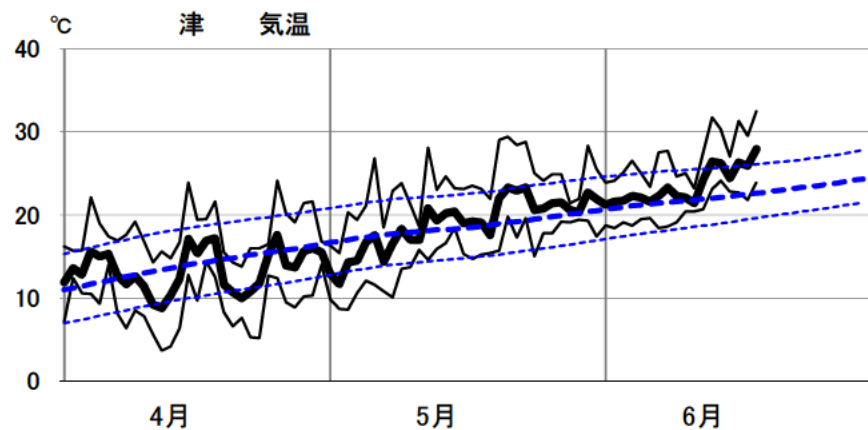
予報期間 6 月 20 日～6 月 26 日

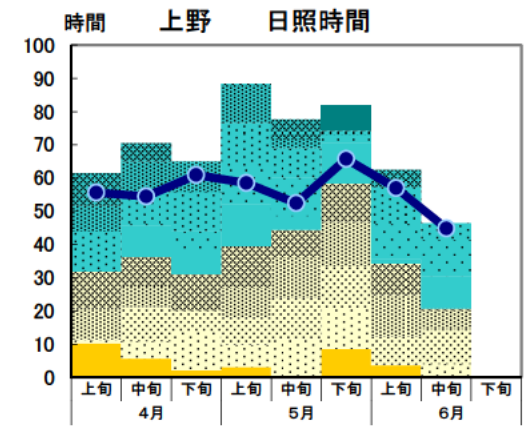
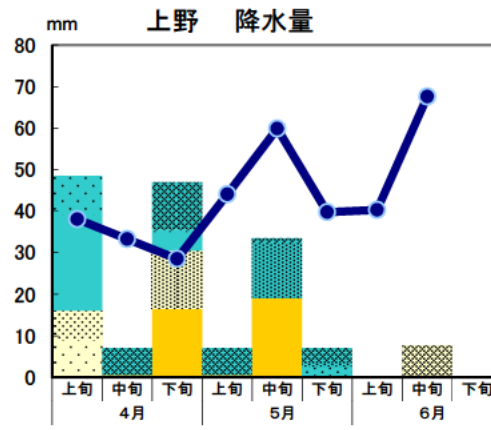
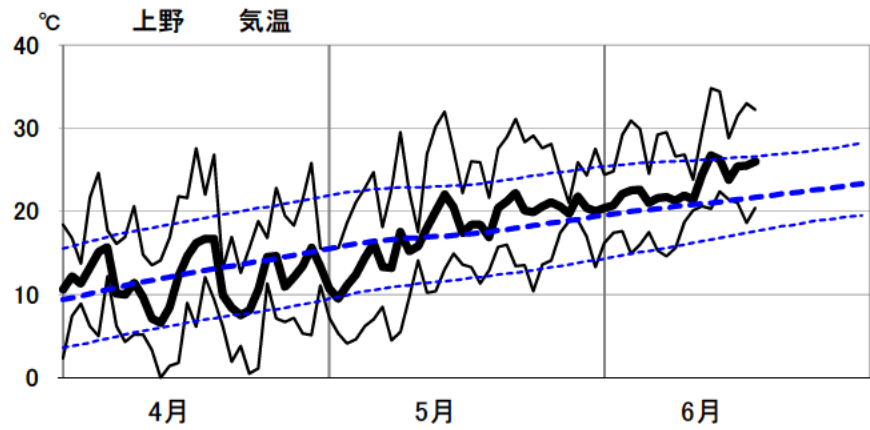
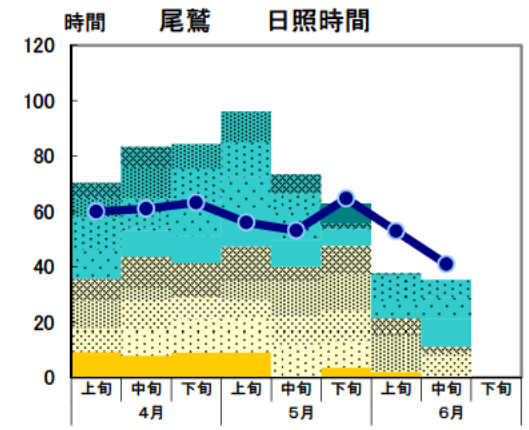
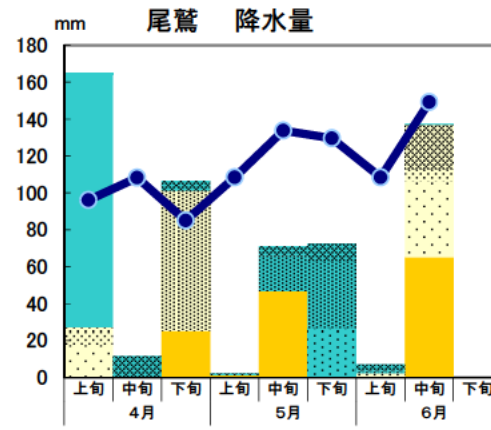
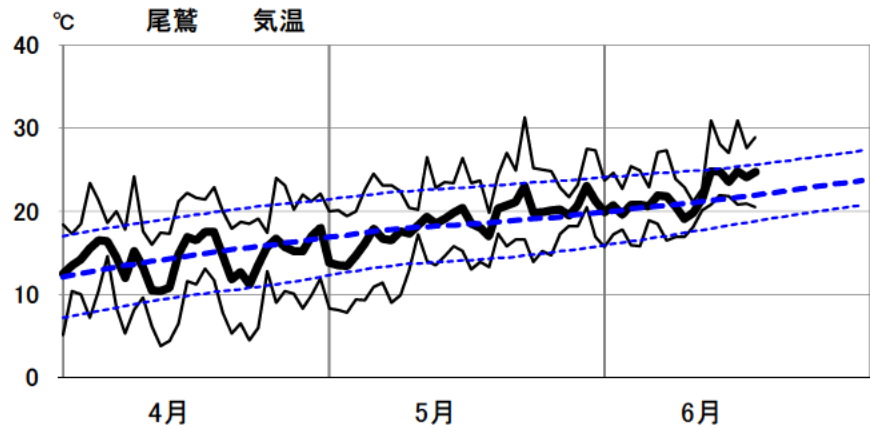
向こう一週間は、梅雨前線や湿った気流の影響で雲が広がりやすく、期間のはじめと終わりは雨の降る日があるでしょう。

最高気温は、期間のはじめは平年より低く、その後は平年並か平年より高い見込みです。最低気温は、平年並か平年より高いでしょう。

降水量は平年並の見込みです。

気象の日別推移 (気象庁発表データ <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php> から作成) (6 月 18 日まで)





- 凡例
- 平均
 - 最高
 - 最低
 - - - 平年平均
 - - - 平年最高
 - - - 平年最低

- 凡例
- 31日
 - 旬10日目
 - 旬9日目
 - 旬8日目
 - 旬7日目
 - 旬6日目
 - 旬5日目
 - 旬4日目
 - 旬3日目
 - 旬2日目
 - 旬1日目
 - 旬平年値

- 凡例
- 31日
 - 旬10日目
 - 旬9日目
 - 旬8日目
 - 旬7日目
 - 旬6日目
 - 旬5日目
 - 旬4日目
 - 旬3日目
 - 旬2日目
 - 旬1日目
 - 旬平年値

7. おしらせ (前回と異なる項目には **NEW** の印があります)

1) 記載基準の注意点

平年ほとんど発生のないか非常に少ない病害虫については、平年並に少ない発生状態の「発生量平年比」を「平年並」、「発生量程度」を「小」と記述しています。

2) 発表日 **NEW**

本年度の病害虫発生予報は次の予定で発表します。

- | | |
|---------------|---------------|
| 第1回 4月25日(済み) | 第2回 5月23日(済み) |
| 第3回 6月20日(今回) | 第4回 7月25日(木) |
| 第5回 8月29日(木) | 第6回 10月24日(木) |
| 第7回 3月20日(木) | |

3) 利用方法

全部または一部をコピーして回覧・配布にご利用ください。ただし必ずページの右下にある「三重県病害虫防除所」の文字が入るようにしてください。

病害虫防除所ホームページには、この予報をはじめとして、不定期に発表される警報、注意報、特殊報、技術情報や、各種のグラフ、写真も載っています。下記のアドレスからお入りください。

<http://www.mate.pref.mie.lg.jp/bojyosyo/>

このホームページはフリーリンクです。リンクする場合、事前の承諾申請等は不要ですが、事後で結構ですのでメールにてご一報いただくと幸いです。

4) 本冊子の利用の手引き書

本冊子の見方を説明した「病害虫発生予報利用の手引き」があります。下記のアドレスからお入りください。

http://www.mate.pref.mie.lg.jp/Bojyosyo/files/h25yohotebiki_.pdf

5) メール配信サービス

予報、警報、注意報、特殊報、技術情報が発表されたときに、ホームページに掲載されたという「掲載通知」を電子メールでお知らせしています。このメールの配信を希望される方は、下記のアドレスからお申し込みください。

<http://www.mate.pref.mie.lg.jp/bojyosyo/merumaga.htm>

6) 農薬登録状況の最新情報

農薬の販売や使用に当たっては、農薬登録上の制限があります。農薬の使用時はラベルをよく読んでください。次のインターネットサイトでは、最新の農薬登録状況が確認できます。

独立行政法人農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報提供システム」

http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm